

まえがき

本書は、英語の冠詞の用法を全体的な視点から体系的に理解するための枠組みを提唱し、それに基づいて、冠詞の基本的な使い方を比較的短期間で学習することを目指した解説書である。読者が本書一冊を読むことによって、冠詞の用法の全体的な構造とその内容、さらに冠詞の使い方の概略を理解できることを想定している。

ここでいう“体系的に理解するための枠組み”とは、理解しやすく、学習を効率よく進められるようにするために、多岐にわたる冠詞の用法を単なる分類ではなく、有機的・立体的に体系化したことを指している。この枠組みによって、さまざまな冠詞の用法の間の関連も含めて、冠詞の用法を理解できることを目指している。また本書では、この枠組みに基づいて、冠詞を実際に決定する場合の手順と判定条件を示し、その判定方法をできるだけ明らかにした。

本書は読者として、高等学校の英文法を一応履修したが、冠詞については、別に取り立てて学習したことがないので、冠詞をきちんと学習したい、あるいは、学習し直したいと考えている、高校生、予備校生、大学生、一般社会人を念頭に置いている。

また、中学校、高等学校の英語の先生方にとっても、授業で冠詞を解りやすく教える際の参考になりうるのではないかと考えている。

冠詞は、中学校における英語学習の最初の段階から登場する。しかし、冠詞を理解するには、英文法や論理的なものの考え方、ある程度の量の英文に接する経験が必要とされる。そのため、最初は、定冠詞を“その”、不定冠詞を“ある一つの”などのような訳語と便宜的に置き換えて説明することが一般に行われている。しかし、初期の段階ではやむを得ないが、これは正しいやり方ではない。

冠詞は機能語であるので、本来は機能を通して理解することが重要であって、訳文を通して理解するのはあくまでも近似である¹。

上級になるに従って、英語の読む力や書く力が次第に向上するが、冠詞に対する理解がそれにつれて必ずしも並行的に進むわけではない。むしろこの後で述べるような理由で、冠詞の学習がなかなか進まず、冠詞は、時制と並んで、英文法の難題として最後まで残ることになる。

冠詞の文章中の出現頻度を見ると、“the”は全単語の中で第1位であり、平均的に見れば、20語に1語の割合で出現する。不定冠詞“a/an”にしても、5位代であり出現頻度は高い。それだけに、冠詞を正確に解釈し、また、正しい冠詞を選択することが強く求められる。

冠詞には多くの機能があり、これらの機能を使っていろいろな情報が伝えられている。しかし、上に述べたように冠詞の学習が進まないために、冠詞の重要性にもかかわらず、現実には、英文を読む際は読み飛ばされ、不完全な文章理解となる。また、英文を書く際には誤った冠詞を使うことになり、意図する内容とは異なった内容が相手に伝わるといった事態が起きる可能性は高いのではなかろうか。

冠詞の学習が進まないのは、次のような事情に関係があると考えられる。

1) 学習初期の段階では冠詞を正確に説明することは難しく、理解するのは容易ではない

これについてはすでに述べたが、最初にその必要性和機能の概要がきちんと教えられないために、それが以後そのまま冠詞の軽視・無視に繋がっていることも否めない。

2) 冠詞によって伝えられる情報に対する評価が低い

日本語には、冠詞に相当する品詞がない。したがって通常は、英語の冠詞が担っているはずの情報を逐一区別し、伝える習慣がない。このことは冠詞が伝える情報は日本語に基づく思考の中では、軽視あるいは無視されることを意味する。

1 注：機能語とは、それ自身意味を持たず、他の品詞——主として名詞——に作用して機能を発揮する語を指す。前置詞も機能語に属するが、冠詞の方が機能語の性格が強い。

この結果、英文を読むとき日本語による思考が働き、極端に言えば冠詞を読み飛ばして“冠詞抜き英文”として内容を理解することになる。日本語による潜在的な思考にどっぷり浸っていれば、このことにまったく違和感を感じない。

しかし、このように理解した英文の内容は英語ネイティブが書いた、あるいは、理解する内容とは少なくとも、冠詞が関係する情報の分だけは確実に異なり、曖昧になる。

他の例に喩えていえば、白黒テレビを見ることに慣れていれば、色を問題にしないのと似たような現象が起きていることになろう。

また、冠詞の十分な理解が進まない状態では、冠詞の機能と使用条件がわからないため、あるいは、冠詞情報を軽視するために、英文を作成するときに冠詞の選択を誤る可能性が高くなる。冠詞の出現頻度が高いことを考えると、文章の中に誤りがある頻度も高くなることが予想される。

結局、日本語に冠詞がないということが、冠詞に関連する情報の評価を低くし、冠詞を軽視・無視することに繋がる。結果として、冠詞の学習価値や意欲が低下し、このことが、学習が進まない理由の一つになっていると考えられる。

英語の冠詞は、1000年に近い歴史を持ち、その間に機能が追加され、発達してきた。決して軽視・無視できるような存在ではない。冠詞は、名詞が指す対象についての情報、名詞の意味の識別(絞り込み)など多くの機能を持っているので重要であり、また使用すれば非常に便利なものである。

3) 冠詞の学習には時間がかかる

冠詞は一つの単語としては非常に多機能・多義であり、相当量の学習が必要となる。これらを理解するために学校の教科書だけでは必ずしも十分でないため、文法書や冠詞についての参考書を読むことになる。

これらの文法書では、冠詞の機能あるいは使い方について分類・羅列し、事例を挙げながら詳しく説明がなされており、また鋭い指摘がなされているものも少なくない。これらには学習者にとって非常に参考になることが記載されている。

また、詳しい本になればなるほど、事例が多く記載され、冠詞の使用に慣れた読者であれば、これは十分参考になり有益である。

しかし、初めて冠詞を学習したい、あるいは、学び直したいと思っている読

者は、これらの参考書に記載されている分類、あるいは用法とそれらの事例の多さに驚くことが多い。また、どのような条件のときにその機能が使えるのかが必ずしも明確ではないために戸惑うこともある。

学習者の多くはこのような参考書を前にして、次のようなことに当惑することになるのではなかろうか。

これらの本を読んでも次のような理由で頭に入らない。

- i) これらの本を多く読んでも冠詞を使うための知識が多すぎて頭に入らない
- ii) 適切な冠詞をどのように選択すればよいかわからない
- iii) 冠詞の用法にいろいろあるが、これらの用法の間の関連がわからない
- iv) 知識の体系としてどのように記憶すればよいかわからない

冠詞に限らず、一般に、ある程度の複雑さを持つ知識を理解し、使えるようにしようとするとき、われわれはそれに関する本や資料を読み、その知識をまず蓄積しようとする。しかし、ここで重要なのは、これらの知識を使うことができるようにするためには、これらを『体系化した知識(理解の枠組み)として自分の中に構築する』ことが必要なことである。簡単なものであれば無意識のうちに体系化できるかも知れないが、ある程度以上の知識になると体系化すること自体が容易ではなくなる。これらの知識を何らかの形で体系化して、理解の枠組みに組み上げることができなければ、われわれはこの知識を理解できないばかりでなく、記憶にも残らず、結局この知識を使うことができない。このことは、冠詞の学習の場合にもあてはまる。

冠詞の学習の場合も、参考書などを読み、その知識を蓄積して理解の枠組みを組み上げる必要がある。それができなければ知識として頭に入らず、使うことができない。この冠詞の用法についての理解の枠組みを体系的に作り上げることは、これまで学習者個人個人の頭の中の問題として学習者の努力に委ねられてきた。

しかし、この理解の枠組みを組み上げる作業は必ずしも容易なことではない。また時間を要する作業でもある。多くの英語の熟練者は、長時間をかけてこの理解の枠組みを自分なりに組み上げ、使用することができるようになっているものと考えられる。